

ふるさと、風

第70号 (2012年3月)

風に吹かれて (49)

白井啓治

『静かすぎる朝 雪化粧目覚めの声を隠して』

この冬は本当に厳しい寒さが続いている。我が家の梅の花もまだ開こうとせず頑なに殻を閉じている。

屋根の雨水を受ける樋の一部に穴が開いて、そこから漏れ落ちる雨滴を受けるために甕が置いてあるのだが、毎朝その水を盗みに小鳥たちがやってくる。だがこの冬は甕に氷が張りつばなしでなかなか水が飲めない。そのせいもあってか明けやらぬ頃からパイパイ、チュイチュイとうるさく朝を告げていた。

ある日、今朝はやけに静かだと思ったら、外は一面真っ白に雪が積もっていた。雪が朝の声を隠してしまつたものだから、目覚めの切っ掛けを失ってしまったのであった。

庭に露の臺が顔を出すのであるが、今年は寒いせいで一月は勿論の事二月の半ば過ぎまで春の先駆けを褒めることが出来なかった。先日、ようやくほつこりと丸い膨らみを作り始めた露の臺を摘んで春の声を褒めることが出来た。これで梅の花と一緒に褒めることが出来たら「静かなる春爛漫」とても言えるのであるが、未だそれは叶わない。

東日本大震災からちょうど一年になる。ギックリ腰でまるで身動きが取れない状態であったが、今と同じようにほつこりとまるくなつていく春を楽しみながら、横になっているときに突然の大揺れにあった。古民家に近い我が家は当然潰れるものと覚悟をした。抱いていたお猫様は、大揺れと同時に安全な所にご主人様を捨てて避難した。起き上がることも容易ではない小生は、部屋の真ん中に座つたまま長すぎる揺れの中で、梁がミシリと鳴つたらその時は小生の最後だ、と冷静に感じていたものであった。

地震とその後に来た大津波の被害は甚大なものであった。だが自然災害の部分には植物を枯らす塩害の中であつても再びの春の命が確実に芽吹いて来ている。冷たく厳しい冬の風も時の移ろいと共に温み、再生力を発揮してくる。性急な焦りを捨てれば、時の移ろいはすべての傷を治癒してくれる。

しかし、我欲の権化である原発事故に関しては確実に命を再生するものが見えない。我欲がつくりだした放射性物質には命の再生という概念が初めから存在していない。そのことは事の始まりから認識のしていた事ではあった。SFの世界ならば現地球上の生命体以外の生命体が再生されるであろう。だがその生命体は恐らく「静かなる春

爛漫」などという表現は持たないのだろう。春を追いたてほつこりと膨らみを創造する時の移ろいの中に、この一年を思い起こし豊かに命を紡ぎ、繋いでいく事とは何か、を改めて考えてみることは無意味なことではないだろう。いや、それこそが復興という命の物語を創ることになるのではないだろうか。

ふるさと風の文庫新刊案内

◎ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の作品が全集となります。今回は第1～6巻が発売されます。(各巻1200円)
(歴史の里石岡とは言われながら、多くの歴史・文化が忘れられていく中、伝え残していかなければならない歴史・文化を独自の打田史学をもつての視点で、改めて見つめなおした作品集)

◎兼平ちえこのふるさと散歩「歴史の里いしおかめぐり」(1200円)
(ふるさと石岡の絵散歩文庫。東日本大震災の被害に合う前の、貴重な石岡史跡の絵が満載です)

※ギター文化館および街角情報センターにて発売しております。

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

茨城の縄文語地名3

鈴木 健

谷津

ヤツ＝湿地

【語源】高萩市安良川にヤチ、秋山にヤチカ。これらは、アイヌ語(縄文語)の【yatchi 泥、沼沢地】および【yatchi 泥、沼沢地】【ka 上、岸、ほとり】に対応する。ただし、yatchi は音節に分けて語源を解読できるがこじつけ気味になるので、これも縄文語からの継承であるかどうか確定するには至らない。しかし、『常陸国風土記行方郡』に古老の話として、谷の葦原に「夜刀の神(ヤト・ヤツノカミ・縄文系在住民は蛇を夜刀の神と言うとの注あり、谷や湿地の主のことか。)」が出現したとの記事がある。この夜刀も当て字であることからすれば、ヤチ・ヤツ・ヤト等はアイヌ以前、縄文にさかのぼる語であろう。東日本でそれらのヤにあてた漢字が谷。西日本ではタニに谷をあてた。

【転音】 yatchi→yatu→yato→ya

所在

東北、北関東、中部で湿地・沢をヤチ(谷地)、北茨城市関本町小川にヤチ。そこは、四時川溪谷の最上流、数本の谷が合流する山村地域。鎌倉、茨城、千葉で谷をヤツ(谷津)。同市磯原町内野、常陸太田市下河合町等県内各地に谷津。神奈川ではヤト(谷言)。行方市麻生町に谷(ヤ)ツ・谷(ヤ)ンの着く地名多数。そのほか、谷中・谷原・奥谷・大谷など。ただし、薬谷(常陸太田市)・染谷(石岡市)などの谷は屋のことかもしれない。

ニタ・ヤツのほかには湿地関係地名としてはサル

がある。北茨城市華川町花園の小字猿ヶ城(サルガジョウ)は【sar 葦原、湿原、沼地】ノ【so 滝、床、表面一帯】で今も健在。同市磯原町木皿(キサラ)は【k 茅・荻】【sar 湿原】の語尾追加母音化、ksara であろう。木皿川(大北川支流)下流の同市中、南部に位置する農村地域である。

入宇田・小津田

イリュウ・イリュウダ＝けもの道／コツダ＝谷あい

語源・所在

北茨城市関南町関本下に入流(イリュウ)、常陸太田市小目町、下妻市大宝・大串、つくば市上の室に入宇田(イリュウダ)。土浦市土浦に入生田。稲敷市阿波に入う田。箱根登山鉄道の駅名にも入生田。【ru】クマの足跡、クマの路、「それ」の意で、一般にクマを指す【ru】足跡、路【sa】の所に遡るほかに語源は考えられないが、往時は平地林にも熊が出没したのだろうか。イノシシか。

北茨城市華川町上小津田(コツダ)は花園川に接し、中央を根小屋川が南流する山村地域である。コツダは【kot】くぼみ、くぼんだ跡、沢、谷【sa】の所】ではなからうか。

大津・阿波

アハ↓オホ(天の旧カナはオホ)＝入

語源・所在

JR大津港駅もあるように、大津は字義通り大きな港で通用するが、それは室町時代にも見える文字である。しかし、より古い『和名抄』(九三〇年代)には「多珂郡梁(テハ・梁の誤記)津郷」とあり、字義にしたがって解釈すれば粟(テハ)の

交易の港ということになるが、奈良時代前後のこの地にそれがあつたとは考えられない。しかも、稲敷市の湖岸に阿波(アバ。中世北畠親房が暴風で流れ着いた天然の良港である)。阿波崎、安婆(アバ)の島(常陸国風土記行方郡)。城里町の那珂川(常陸国風土記那賀郡(粟河)畔に粟・阿波(テハ)山、阿波(和名抄)がある。そのアハ(ハ)を漢字以前の地名として検索すると、【apa 入口】に出会う。それらは、海や海に続く水域から内陸に進む入口だった。城里町の阿波(aha)山は、a-to の転音で、後に大山城など大(oho)山にもなった。同様に梁津は大津になった。したがって、これらの大はオホという字音を借りただけで、大きいという字義は採っていない。津は港であるが、より古い縄文語では【ru】岬、【ru】であったものが、岬のふところ、つまり岬によって風波が遮られる舟溜まりを指すようになったかと思われる。大津はそのような条件に適合し、しかも、そこに里根川が開口していた。

【転音】 apa→aba／apa→aha→oho

オツポリ・大響・水木

オツポリ＝深穴／オオ

ミカ＝深浦／ミズキ＝岬

語源・所在

千葉県東葛地方で、洪水の時に堤が切れて掘れた池。川沿いの沼地、深い水溜り、大雨などで川底や道などにできた穴をオツポリと言う。それは【oho 深くある】【poru 穴】の促音化のoppori であろう。利根川の右岸(千葉真側)の旧河川敷に位置する取手市小堀は、オオホリと読むが、通称はこのオツポリである。鬼怒川と小貝川の間、低地にある常総市大字小保(オボ)川ほかの小保

はこの oho であつたに違いない。日上市滑川町のオボ内の原地形はどうであつたか。

同市田楽鼻と古坊地鼻の間はゆるく弓状を呈しているが、深い絶壁が続き、両岬が海食を受ける前はより深く湾入していたのではなからうか。そのような前提で、同市大みか(壺)町を見ると、【oho 深い(※崖の深さ)】【myu 浦、入江、入海】【ka 上、ほとり、岸】。隣のみか(壺)の原町は、【myu 浦、入江、入海】【ka 上、ほとり、岸】の原【para 広い】。「密筑(ミツキ)の里あり。村の中に淨泉(イツミ)あり。」『常陸國風土記 久慈郡』と書かれた水木町は、田楽鼻が【myu 浦、入江】に【tuk 突き出る】【i いる】であつた。

なお、溺れは【oho 深くある】【re 使役の意を表す。】で、その人に対して深くあらしめる、つまり、深みにはまるが原義。日上市は、

転音 ohoporu→oppori/oho→obo

【oho 深い】は、日本語のなかで、右のように「大」があてられるが、大山・大森・大川・大谷津などでは、大きいという本来の「大」との見分けができにくいことがある。大島・大木など、「大」本来の語源と転音は、【hup 腫れる、腫れもの】→hup (鹿児島県喜界島 大(ウツ)浜)→ufu (沖縄八重山 大)→uhu (沖縄本島 大(ウツ))→oho (本州 オホ)と見たい。オオの旧カナがオホとなる根拠が up。沖縄に古形が残る。ただし、右の大木も【ay 林、森】【pok 下】の当て字で大木(タイボク)、読み替えてオオキなどもありうるから面倒である。

大串 オオクシ=大きい穴

語源

「水戸から大洗に行く途中に大串貝塚があつて、縄文時代の貝塚としてよく知られている。

……この大串貝塚のことでは、『常陸風土記』に、『平津(ヒラツ)の駅家(ウマヤ)の西一二里に岡あり。名を大櫛(オホクシ)といふ。上古(イニシヘ)に人あり。体(カラダ)は極めて長大に、身は丘壘(ウカ)の上に居りて、蜃(ウミギ)を採りて食ひき。その食へる貝、積聚(ツモり)て岡と成りき。時の人、大きに朽ちし義(ヨコロ)を取りて、今大櫛の岡といふ。その大人(オホヒト)の踐(ラ)みし跡は、長さ三十余歩、広さ二十余歩あり、尿(ユマリ)の穴(アト)は、二十余歩ばかりあり」とある。前記『巨人の磯』の書き出しにはこのような文言が入っていた。松本清張はこの巨人伝説に着想を得て『巨人の磯』を書いた。朽ちて大きく積もつた貝殻を見て古代人は巨人の仕業と考えたらしいが、ここでは大櫛という地名の起源をとりあげる。「大きに朽ちし義を取りて、今大櫛の岡」、貝殻が大朽ち(ウチ)→大櫛・大串(クシ)。チとシを区別しない土地柄ゆえ、それも道理といえる。一方、こじつけ気味であるが、朽ちはクチの当て字と見て、足跡や尿跡の大きさ、深さとの関連で、大(オホ)あるいは、【oho 深く】【kot くぼみ、くぼんだ跡】→オホクチ→オホクシもないことはない。貝塚のある岡に大きなくぼみがあるというのは、堅穴(ツラ)居跡に違いない。【kot くぼみ】【an ある】=堅穴があるところがコタン。【kotan 部落、村。ただし、われわれが考える村と違って家一軒しかなくてもコタン】と言われていた。集落に共通な建築様式の家のことか。

転音 ohokuti→ohokusi/ohokot→ohokuti→

ohokusi

五浦

エツ=ミサキ/イヅラ=双翼岬

語源

「五浦は大津港と平潟港との間に太平洋にむかつて突き出た小さな岬で、海食による断崖をなし、自然の洞窟や小さな島がある。この岬に岡倉天心、横山大観、下村観山など、いわゆる院展派の創始者たちの別荘跡があつて、岬の突端には天心が設計した六角堂がある。」(松本清張・前書)

北茨城市大津町には五浦と呼ばれる景勝地がある。漢字の意味から語源を考えれば、浦は入り江、それがいくつも入り組んでいるから五浦ということでも済んでしまう。しかし、茨城の人が呼ぶように、五浦をイヅラとすると、この地では「ト」は区別しないから、それは、エヅラ、【etu 鼻、岬】e 顔/tu 峰】【ra 翼=rap 両翼を張つたように突き出ている出崎】。rap を選んでも例によって【etu】に聞こえる。和歌山県白浜町には江津良(エツラ)浜があり、そこも、この意味どおりのエツラ地形。そして、津波で流失したこの六角堂の跡地から見る五浦も、両翼を張つたように突き出ている出崎に囲まれている。茨城には江面(エツラ)さんという姓もある。江戸もまたこの【etu】である。家康入国当時の江戸城は日比谷入江の小岬状台地の先端にあつた。皇居のなかには今も縄文貝塚がある。北茨城市関南町神岡(カミオカ)下一帯を流域とする江戸上川は、太平洋に開口している。その江戸上川はか(つ)【etu 岬】【ka 岸】【myu

入江] になつていたところか。氾濫の絶えない川である。近くに尻無川もあった。稲敷市江戸崎は小野川下流の沼状の対岸から突き出ていた岬に面している。そのことから、【etu 岬】【sa 浜、前、そば】【ke 部分】 岬前であろう。小美玉市の大字江戸はかつて岬状の地形だったかどうか知る由もない。三重 江戸鼻、e-i、静岡 伊豆、三宅島 伊豆岬、埼玉 伊豆ヶ岳。

転音 etura→idura / eturap→idurap / etu→edo / etusake→edosaki / etu→idu

鼻・崎・岬

ハナ・サキ・ミサキ 岬

語源 【etu 鼻、岬 || e 顔 / tu 峰、岬】 顔の峰や岬が鼻であり、海では岬である。それはまた、【pa 頭、崎】 【na 「方向」の意を表す。】 ということで、ハナ(鼻・岬)となつて日本語に引き継がれた。【sa 浜、前、そば】 【ke 部分】 はサキ(先・崎・前)として先頭・突出部・前方の意味の日本語となった。磯崎に磯前(サキ) 神社があった。岬は神がいるところから、ミサキ(み先、御崎) とされるが、それ以前に即物的・具体的な地名があつたはずだ。ミサキは 【myu / moy 浦、入り江、入海】 【sake 前のところ】 ではなかつたか。神奈川の三浦は myu と同じ意味の浦の重複地名か。

転音 pana→hana / sake→saki / maysake → Misaki

所在 北茨城市 鵜ノ子岬・九ノ崎・大津岬。日立市 鵜ノ

岬・田楽鼻・古坊地鼻。ひたちなか市 磯崎。大洗町 大洗岬。隣接銚子市 犬吠崎・長崎鼻。鹿嶋市 爪木ノ鼻。行方市 天王崎。稲敷市 妙岐ノ鼻。和田岬・西ノ洲岬。堂崎鼻。美浦村 稲荷ノ鼻等。縄文時代の命名とは限らない。むしろ、縄文系の後裔たちが、語源を離れ意味だけを受け継ぎ、岬・鼻等を地名に使用したものと思われる。

イヌボイ・犬防

犬防・犬吠・イヌボイ 漁小屋

語源 常陸大宮市西野内の久慈川近くにイヌボイ・犬ノ下、常陸太田市和久・赤土、大子町埜に犬防、これらは、千葉県の大吠(イヌボイ) 埼とともに、【inun 漁のために水辺に向いて滞在する】 【puy 穴、岬、頭】 であろう。蛙獲りの季節小屋か。桜川沿い水戸市有賀にも犬房がある。桜川市大田は 【inun 漁のために滞在する】 【ta 所】 か。笠間市矢野下お犬ノ川はどうか。京都府丹後半島の犬岬の語源は 【inun 漁のために水辺に向いて滞在する】 【sa 前】 【ke 部分】 かと思われ、今でも釣りの好適地である。たまたま近くに犬が坐つた形に似た岩があるそうなので、犬を当て字にしたということであろう。舟との同居で有名な、近くの伊根漁港のイネも、【inun 漁のために水辺に向いて滞在する】 【ne である】 【u ところ】 であろう。

転音 puy→boi→bou

2012 CONCERT SERIES

ギター文化館は今年で20周年を迎えます。魅力あふれるコンサート企画で皆様をお待ちいたしております。どうぞよろしくお願ひいたします。

- 3月 11日 《ARC》タンゴトリオ コンサート
- 3月 18日 新井伴典・松田弦ギターデュオリサイタル
- 3月 31日 クエンカ兄弟ギターとピアノコンサート
- 4月 22日 吉川二郎・おがわゆみこジョイントコンサート
- 5月 6日 北口功 ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、
また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。
オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

復興のためには：

菅原茂美

年が明けたと思つたら、早や3月。

東日本大震災から丸一年。地震学者さえ予想しなかった巨大地震に、巨大津波。それに加えて、原発事故の発生。トリプルパンチの複合災害に見舞われたが、こんなものに負けてはいられない。今年も復興元年として、国民は意を決して、立ち上がらなければならない。

円高不況や、31年ぶりの貿易収支の赤字(2兆円)。それらが復興の推進力を鈍らせてはいけない。貿易収支赤字の原因は、円高・自動車の輸出減に原発事故で火力発電のための、液化天然ガスの輸入が大幅に増えたためだと言われる。

更に12年度末には、国の借金が1085兆円となり、世界一の借金大国。この額は国民一人当たり850万円の借金に相当するという。貿易立国の日本が、その収支が赤字と来ては、ただならぬ覚悟で、この難局を切り抜ければならない。ギリシヤは、対岸の火事ではない。与野党が重箱の隅を突つような狭い見で、ケンカなどしている場合ではない。

不況・借金大国に、巨大地震・津波。未曾有の放射能災害。悪いことは重なるもので、いかにして、この局面を切り抜けるか。新総理のリーダーシップに期待したい。

現状は、敗戦当時にも劣らない超難局とも言えるが、終戦直後は、「衣食住」すべてが喪失し、しかも全国的規模であった。更に占領軍が駐在し、何事も国民の意思で決定などできる状況ではなかった。それを考えたら、今回は被災地が限局的であるし、海外からの善意に満ちた支援も多い。国

民が心を一つにして、助け合い、知恵を出し合つて、復興一筋に邁進すべきである。政府は国論をまとめ、暫定的な増税もやむを得ないと思う。社会保障・税の一体改革で、消費税率を上げるなど、誰が政権を取ろうが、避けて通れない日本の実情であろう。反対する政党もあるが、負担増なくして高福祉は、筋が通らない。

* * * * *

さて、日本は災害の多い国なのに、非常事態に対処する十分な予備費を用意しておかないのは、酷すぎる。各年度、莫大な国債発行で賄っている状況なので、災害準備金どころではない、ということも知れないが、やり繰り工面でもう少し国民の安全保障に、力を入れておくべきではないのか。(何事もなく年度末に予備費が余つたら、借金返済に充てればよい。)予備費の必要性は、もつともっと大きな災害が重複して襲来する可能性もあるからだ。火山の大噴火・巨大地震連発。それに伴う大津波。後述するパンデミック(世界流行病)で、国民が大量死する可能性は、常に存在する。それへの対応が、できるかできないかで、平凡な「政治屋」なのか、未来を見通した真の「政治家」なのかが決まる。

さて、この未曾有の危機を乗り越えるために、先立つものは国家財政である。その借金総額が、国民総生産(GNP)の2倍近いと来ては、何をか言わんやである。正に世界最大である。歴代政府の無責任さよ。国民にいい顔を見せたいために、無秩序に大盤振舞をしてきた「付け」としか思えない。そして国家の将来を考えない国民も無秩序だ。『おらが先生はあれも作ってくれた。これも直してくれた』と囁し立てる。おだてに乗って先生

も、国家百年の計を忘れる。

そこで、わが国の財政が、なぜこんなにひつ迫したかを、私なりに分析してみたい。

まず国の歳出が増えた原因はなんだろうか？私我真つ先に思い当たることは、『要らざる所に、余計な金を注ぎ過ぎた』。具体的には、各省庁が縦割りの弊害で、予算の分捕り合戦。国益より省益優先。高級官僚が自分の天下る事業項目を増やし、渡り歩く職場を増やし過ぎた。膨大な予算を持つ独立行政法人や、社団・財団法人など数えきれないほどある。事業がなくなれば省庁は廃止・統合される。地方に権限を委譲すれば、自分達の職場がなくなる。必死で不急の新規事業を生み出し、社会にその存在感をアピールする。

廃藩置県で官選知事を送り込み、国は地方を従属させた。即ち国税で絞り上げ、地方の自由度を奪い、補助金として分配し、恩に着せる。日本はいまだに明治維新の悪弊を引きずっている。

そして国際協力など、親方「火の車」なのに、そこまでやる必要があつたのか？中国など日本から多額の援助を受けていながら、更に途上国へ援助をしている。「また貸し」だ。

日本は真の実力がない癖に、強力な海外援助で、いかに「大きな奢り」を示してきたかは、援助を受けた現地を訪ねてみればすぐ分かる。三の要求に対し、十の施設を補助し、現地では電気料さえ払えず、遊休施設として眠っている例もある。

地方公務員として長年の経験から、国補の大事業を実施するとすれば、地方自治体の分担金も莫大なので、国の補助事業など受けたくないが、半ば強制みたいにも、大きなプロジェクトを推進せざるを得ないこともあつた。そしてその事業単価は、

常識では考えられない高額で……その理由は？……後は賢明な読者にご判断をお任せする。地方も国も、こうして借金を無節操に増やしていった。

そして国会議員が自分の得票を増やす為に、莫大な国費を投入し、巨大なインフラ等を構築していった。今、国民にとって本当に必要かどうか分からない巨大ダムの建設や、干拓事業など。当然、ゼネコンなどから巨大な献金が目当て？……と疑われても仕方あるまい。

そして北欧など先進国が、微に入り細に入り国民の福祉に力を入れているのを見てきて、それに見合う高い税率を課していることは棚に上げ、片手落ちの福祉行政に力を入れ過ぎる。それゆえ、働かずに生活保護を受けている人もかなりいる。

震災の影響もあり、生活保護費受給者は、ついに200万人を突破した。日本では50人に一人が生活保護を受けている。勿論止むにやまれぬ人もいるが、味をしめて怠惰な人もかなりいるという。自立こそ生存の基本。紹介された就職は、体質に合わないとか何とか。高福祉も良いが、国家財政に見合ったものでなければ、いずれ、受給者も泣くことになる。そして、彼等の医療費はすべて無料。タクシー利用どころではない。飛行機で病院に通う受給者もいるとか。生活保護費より少ない収入で懸命に頑張っている人も多数いるというのに。これでは財政は破綻する。

巨大インフラの件だが、例えば新幹線は、まず札幌から鹿児島まで「背骨」をガツチリ構えてから、「肋骨」を作るのが筋であろう。それが『背骨は後でよい、まず肋骨だ』……。これでは何をか言わんや……である。政治は正に「弱肉強食」と言われても仕方あるまい。力の強いものが先んじて「利」

を掴む。6号国道を見てほしい。わが国の一桁台の重要国道なのに、バイパスはおろか、片側一車線の、みじめな姿。地方の市町村道でさえ遥かに素晴らしい道はワンサとある。毛細血管の方が大動脈より太くなつては、バランスを崩し、いずれ、その臓器は機能不全に陥る。災害に強い基幹道路の整備は国家の基本であろう。道理に従わない人気が取り政治は、いつかは必ず破綻する。

国策として進めた原発も、地震大国の日本では、いかほど心を尽くして建設しても、過ぎることはないはずなのに、地震には付き物の、津波は過小評価をしている。安全神話の捏造だ。その結果が、このたび太平洋沿岸を襲った巨大津波による原発事故だ。国策の看板を背負った、奢りが見える。

* * * * *

日本も、もう少し大人になれ！ と言いたい。戦争に負けて、ただでもらった民主主義だから根が浅い。言論の自由などと言って、人を誹謗するマスコミの人權侵害など、履き違いも甚だしい。本当に欲しくて、国民が血を流して勝ち取った民主主義なら、「自由」を「勝手主義」と置き換える愚行は、当然起きるわけがない。

敗戦国日本が、早く立ち直って、世界の先進国に肩を並べたい……。その気持ちはよく分かる。それが、借金を次世代に付け残し、俺の政権時代に、あれもやった・これもやったと、歴史に名を残そうとする心根が浅ましい。ある事業の会計がチョット豊かになると、すぐ無駄遣いを始める。そのよい例は、十分に利用されもしない宿泊施設や保養施設など、むやみやたら建設し、今、その維持管理ができなくなつて、民間に一割にも満たない値で売り払つたではないか。余分の金ができ

は、「単年度会計」などと言わず、次年度に繰り越し、借金返済に充てておくべきだ。

少子高齢化が進み、年金制度など、福祉関係がニツチモサツチモいなくなると、使途限定で消費税を上げるといふ。現状を見れば消費税の値上げは、やむを得ないと国民は納得する。しかし、公務員の給料をいきなり8.03%も下げて、歳出を減らそうとするなど、乱暴すぎはしませんかと言いたい。国会議員の数や高額の歳費はそのままでは、絶対に納得がいかない。ネジレ国会で苦しいのであれば、参議院はなぜ必要なのか。参議院が衆議院と同じ意見なら、参議院の必要はなくていいはず。それが常に反対ならば、むしろ有害な存在としか言えないであろう。敗戦国で押しつけられた憲法なら、早速改正すればよい。

とにかく、二院を一院にし、政党交付金を無くし、国会議員の定数を減らし、議員報酬は登院の日だけ「日給制」にすればよい。それでも間に合わないから、公務員の数や給料を減らしてほしいというのなら、筋が通っている。国家破綻の瀬戸際なら、まず、政治家自らが範を垂れることだ。

* * * * *

歳出が増えた原因など断片的に以上のべたが、では、いかにして日本が立ち直るか。それは技術立国で、産業を活性化するか方法はあるまい。

最近、造船・自動車・家電製品など、韓国や中国が猛烈な勢いで伸びてきている。技術立国は、常に後から追い掛けてくる者の先を行かなければならぬ。そのためには、研究開発部門に必要な経費を惜しんではならない。行政改革やら事業仕訳で、研究開発部門が縮小する「愚」は、決してあってはならない。研究開発を促す為には、まずも

って「教育制度の改革」が必要であろう。国家の繁栄は、一にも二にも「人材の育成」だ。

現在の詰め込み主義・知識偏重の教育制度は、一体あれは、なにものだ？ あんな愚かな制度が何年たつても改革されない理由は、一体何なのか？ 教育は、記憶や知識の豊富さを争うところではあるまい。「志」を育てる所であろう。集団生活で他人に迷惑をかけない。いじめがあれば、その親の再教育が先だ。創意工夫・発想転換の訓練をさせ、その習慣を身につけさせることが教育の基本。ささやかなものでも、個性を發揮した発想を、大事に育てる手助けをするのが教育であろう。勿論一定水準の知識がなければ道は開けないが。とにかく、偏った選抜入試が諸悪の根源だ。未来の宝石を、石ころのように捨てている。

そもそも、偏差値の高い、有名大学出身者で固めた高級官庁が、国民のためになにをしている？ 医薬品の許認可など、緊急性のある物が後回しになったり、魚の住めないコンクリートで固めた川を作ったり、食糧自給率が40%なのに、多額の金をかけ、耕地整理をした水田に米を作らなければ補助金を与えるなど、政治の貧困に加え、行政の無能ぶりも度を超している。難関を突破して合格した超エリートが、政治の愚行を正せないのか？ 霞が関の殿堂から降りてきて、この乱れた底辺をジックリ見てみる！

* * * * *

人類は、これほどまでに文明が進歩したのだから、後、何を進歩させなければならぬのか？ と思うかもしれないが、まだまだ解き明かさなければならぬ宇宙の神秘は、奥深い。しかし深遠な科学の探求は、急いでほしいが、それよりも、現

実的な身近な問題が山積している。

「がん」の対策など全く物足りない。これだけ多くの人々が、がんで苦しんでいるというのに。

病原微生物対策など、多剤耐性菌の猛威で、医療制度はどうなることかと危ぶまれる。人間が新たに強力な抗生物質を發明すると、敵(細菌など)は、更に姿を変え、抵抗力を増す。まるで人類の浅智慧をせせら笑うが如き感である。そして、エボラ出血熱などエマーゾングウイルス(突然現れて猛威をふるうウイルス)が、人類を恐怖のどん底に突き落とす。それが時により、人類滅亡に發展する可能性も十分あり得る。

1918年のパンデミック(世界流行病)ではスペイン風邪(病原体H1N1)により、世界の人口20億人のうち6億人が感染し、5000万人が死亡した。日本では人口5500万人で、48万人が死亡したといわれる。原因は、鳥インフルエンザウイルスが、突然変異を起こし、人間にも感染し、強烈な肺炎死を起こしたものである。

1997年8月、アラスカの凍土から4人の遺体が発掘され、その死因はスペイン風邪による肺炎だったことが分かった。ウイルスは凍結状態なら何百年も生きていく。もし、熊などが遺体を損壊し、渡り鳥などがその病原体を運び去り、再び世界流行の原因にならないとも限らない。軍事大国が覇を競うどころの話ではない。こういう人類存亡に関する対策がまず先であろう。ノーベル平和賞授与も、どこかのケンカを仲裁したぐらいでは物足りない。全人類の安全性の確保がまず先だ。私に言わせれば、月に足跡を残し、国威を競うよりも、まず人類存亡にかかわる強烈な感染症の防御対策を強化することが先であろう。

* * * * *

ならば、国家の財政をいかにして改善するか？

こんなことが私などに提案できる話ではないが、行政の縦割りで予算を分捕り合う霞が関が、真から目覚めなければ明日の光はさして来ない。国がやるべきことは山ほどあるが、国家百年の計を視点に政府は良識を持って査定し、物事に重要性の序列をつけるしかあるまい。借金返済の先送りには厳に慎まなければならない。無いものはないのだから、誰がどんな屁理屈で攻めてきても、ガンとして跳ねのけなければ、国家は破たんする。

それにしても人間の欲望の深さよ！

他人はどうであれオレさえよければそれでよい。子孫がどんなに苦しもうが、オレの生活が、今よければ、それでよい。国家の借金などオレの知ったことか。子孫が使うべき資源など、眼中にない。

すぐ国会を解散して政権をオレによこせ！ まるで鼻たれ小僧のケンカではないか。私はどの政党に与(くみ)するわけではないが、今の与党に政権担当能力なしとの悪態放題は、チョウ醜い。

ならば今の野党党首に聞きたい。長年政権与党として借金の垂れ流しをやってきたのは、どこのどいつだ。連帯責任として、過去の政権与党は、国の借金の何割かを、自腹で返済する覚悟があるのか。私有財産を処分して、国の借金返済に充てる覚悟があるのか？ その覚悟がないなら国会議員になど立候補するな！ 借金を作った社長は、自腹で弁償すべきだ。そうでなくとも震災復興のため、国家の一大危機だというのに、私利私欲のため、政局を争っている場合ではあるまい。

爺さんが

「これは爺ちゃんの宝物だ。可愛いお前にあげるよ。世界に一つしかない宝物だ」

と言ったどの子にもどの子にも渡していた事を思い出す。爺さんの宝物それは爺さんが夢を掘り出す作業の中から出てきた物だった。発掘の時重要視されず特別収集されなかった様子だった。でも爺さんにはこだわりがあり見捨て難い物だったという。何故大切に扱わないのか不思議がっていた。石を高く上げてみたり、一寸はなして眺めたり、横向き、後側に置き替えてみたりしていた。持ち方を替えたり、叩いたり投げたりして首をひねっている。確かめながら楽しんでるようだった。

「お前ならどう扱う」

という問いかけも晩酌の膳のつまみの一つであった。それからその日の作業の話が始まる。作業の中から見えてきた状況、想像出来る歴史の流れ、住んでいた人々の生活等、私も話に加わって楽しい時間だった。

「夫婦げんかにも使ったかしら」

と話しを折ったりしたのも私の悪いところだったか、ていねいに作業を進める爺さんの姿が話から分かるひとときだった。

宝物の一つ一つが、何年もかかって孫達の小さな手に渡されていった。

発掘は夢を掘りすすめる仕事だ。この土の中にある世界を想像すると実に楽しい。と口ぐせのように言っていた。

私は途中で気がついた。「そうだ。孫達に渡すこ

の石と爺さんの持ち続けている夢の言葉、発掘を結び付けていこうと考えた。そして作業現場に誘い始めたのは十五年前からになる。

里ちゃん、歩ちゃんを連れて谷津田の一番奥へ行ったのが始まりだった。田の跡だと話してくれ。孫達にとつてそこに爺ちゃんがいたという喜びでいっぱいだった。現在は江戸時代中期の庄屋の曲がり屋が民家園という名称で建っている。

権現山古墳の発掘はやりがいがあったらしい。霞ヶ浦を見下し村一番という規模をほこる古墳は、時間もかかったが指導の先生、学生さん達との交流もあって夫にとつて得意で満足な時期だった。その後その周辺の草刈りを骨みおしまずやっていた。

墓地近く、浜近くの発掘の時は、一番下の美ちやんと三人連れて行った。爺ちゃんと婆ちゃんがいる。と走っていく姿に私も嬉しかった。普段一緒に生活していない祖母に合つて喜びを素直に出している。「ああ、よかった」と呟いていた。古代人の使用していた水路も、人家跡も今は店や駐車場になった。

爺さんは帰ってくると今日の作業の片付けと、明日の準備をする心浮くひとときらしく気のむく様に行っている。道具の確認は勿論だが、他の物を利用、工夫して使いやすい物を作り出している。行く先々の地名、地域の事、人の事も確認していく。

綾ちゃんと歩ちゃんが行った霞ヶ浦が村の北側に入り込んで古くから開けた台であった。期待にはずれ終戦後の炭焼き跡、位だったが「まことの子供か、みっちゃんの孫か」と発掘を見に来たお年寄りに声かけられて返事をしていった。大人と話

をするよい機会だと思う。そこも今は道路が広がっていた。

一週間から十日と作業が続くと近所の人や関心のある人が集まってくるそうだ。寄ってきた人もさまざまらしい。事細かく聞いてくる人、畑の中にや何もないだろう。無駄な事だ。その挙句、税金の無駄使いだな、という話になる。むきになる訳ではないが、埋蔵文化財の話や保護法の話をしてやるそうだ。聞く耳持たずの人が多いらしく、複雑な思いをする事が多いそうだ。華やかに沢山の出土品の出してくるのは、当時の国や地方を支配していた人々のごく一部の物で、大半は小さな一族、血筋のつながった者同志が支え合つて日々の暮らしをしていた所ですよと説明していくそうだ。

美ちゃんと菜っちゃんを誘ったのは寺や館山跡だった。お茶の時間と重なったときは、仕事の子供連れでお邪魔かなともためらう気持ちもあった。いや次の世代に夢をつなぐのが私の役目だからと思ひ直し自信を持ち続けた。寺には本堂が建ち、館の一部に人家が出来た。作業している人達もともすると時給でやっつてんだという空気になるそうだ。子どもの姿を通して、大人達も作業の中に将来をみて貰えるといいと思う。

《ふる》の《》

アレンジ蕎麦・蕎麦天席料理のお店です

(ギター文化館通り)

看板娘(大)「じいじ」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

電話 03-34-63-6000

合併してからは小川、美野里の作業が続いた。孫達も大きくなってついでこなくなつた。

「いたいた真ちゃん、佳ちゃん、相ちゃん、倭ちゃん、花ちゃんを連れて妹の応援も得て大坂、大谷越え竹原に行った。爺さんはここで御話しの合う年上のお婆さんと美野里の歴史の話しを聞いたり発掘の話しを沢山したそうだ。思い出も沢山出来た夏だった。暑い暑い日が続く、その後体調を崩してここでの発掘が最後の仕事となつた。

残念だったろう。くやしかつたろうと思う。暑い日、寒い日、風の日とこつこつ、こつこつと、頭上に、背中に悪口雑言をあびせられながらも、夢を追って探し続けていた人はもうこの仕事をしなくなつた。

楽しみにしていた実家の本堂跡の発掘もしなかつた。今迄一緒にやってきた仲間の作業している所へ行こうと誘つても腰をあげなくなつた。

「石は何も言わないから、その声を聞きたすのはお前たちだよ」と爺さんは孫達に宝物を渡した。育てていくかどうかはあの子達自身になる。

一番下の孫、花ちゃんと高台から霞ヶ浦を眺め、夕陽の中で発掘を見せて貰つた。もう爺ちゃんの姿はない。でも爺ちゃんの仲間がいた。そこでしばらく土をいじり、運んで手伝つた。大人と話しをしどの孫とも同じような時が流れた。爺ちゃんの話題も出た。主人の仲良しだった光さんが、「おじちゃんも花ちゃんの爺ちゃんと同じように、夢を捜して掘つてんだよ。その中宝物も見つかるんだよ。毎日毎日が楽しみなんだよ」

「うん」

と話しが続いていた。

「見えない所にある物を見つけるの」

「そうだよ。花ちゃんだんだんわかつてくる」
未来にむかつてともいい場所になつた。

いしおか雛巡り二〇二二 兼平ちえこ

昨年のいしおか雛巡りは二月十二日～三月三日まで行われた。お雛様達は二十日余りのお役目を終了し、それぞれの場所にもどり、ほつと一息のとと、三月十一日、大自然の猛威と、人災といえる放射性物質の襲来に、現在でも先の見えない不安が続いている。間もなく一年が過ぎ去ろうとしている。

旧石岡市内では未だに震災の爪痕の建物の補修や取り壊しが行われている。そんな中、今年も『おかえりなさい いしおか』と題して「ただいま」
「おかえりなさい」そう答えてくれるともなつかしいひなまつり。いしおか雛巡りが二月十一日～三月四日まで行われた。

今年も昨年より少ない九三軒の参加店の店先にはおすましのお雛様や笑みのお雛様が出迎えてくれていた。なかでも今ではメインスポットとなっているまちかど情報センターのお雛様達による、石岡の歴史物語を繰り広げる大舞台である。今年の大舞台は勿論、NHK大河ドラマで放映中の「平清盛」。

桓武天皇の曾孫である高望王が平朝臣の姓を賜り、八八九年に上総介に任ぜられ赴任し、その高望王の長男、国香が九三〇年常陸国の大掾職を務め、長官として活躍した。そして国香の子貞盛が一族を率いて常陸国から伊賀、伊勢へ移つてゆき

そこで伊勢平氏となつたと言われている。国香から八代目の平清盛がひきいるきらびやかな一行が龍に導かれ、金色の雲に乗つて到着。

「時は春、常陸国府ではひな祭りの宴たけなわ、ここは都かと見まごうほど、この国は雅やかな空気に包まれている」(まちかど情報センターパンフレットより)宴たけなわ、飲めや歌えのひな人形にはインフルエンザや花粉に悩まされマスクをかけたお雛様、五人ばやしのエクザイル、マルマルモリモリのお雛様等々色々と工夫されたお雛様が楽しんでいる。段飾りでおすまし顔のお雛様も不思議と、それぞれの役になりきっている様子におもわず笑みがこぼれた。

そしてもう一つメインのまちかど情報センター常設展示場である常陸国府館に展示されたお雛様は、昨年の地震のあと被災され蔵の中を整理された時に偶然見つかかり、そのご家族により情報センターへ寄贈(明治時代のものらしい)されたもので、お雛様と一緒に寄贈された、つげのくしと簪やお道具、打ち掛け等一揃いでお嫁入りの舞台が設けられていた。ここのお雛様たちは少し腰を低くして視線を雛様と同じくすると、思わず微笑みかけて、話しかけてくれそうで愛らしさに、心なごんだひとときであった。

その他情報センターご自慢の雛様飾り付けはみんなの広場に、鉄道ファン必見の鉄子の雛まつり、そして常陸国総社宮の神楽殿と参集殿に古いお雛様を展示。ことしも十二分に楽しませて頂いた。

まちかど情報センターの職員皆さまのご苦労はいかばかりか、「自分達も楽しみなながら飾りつけをした」との事でしたが本当にお疲れさまでした。微笑みと優しさを有難うございました。来年はど

んな歴史絵巻を展開し、どんな感動を頂けるかここを待ちしています。

今回も昨年同様街おこしをおおいにPRした雛まつりであり、街おこしに懸命に尽力している方々がいることにこころ動かされた。

それからもう一か所、ご紹介します。石岡小学校敷地内にある石岡市民俗資料館には、今年は二台の段飾りと二ケースのおひなさま、つるし雛、そして大正五、六年頃の珍しい掛け軸の雛飾りがお目見えしていた。明治、大正、昭和と商都として栄えた町としての民具や日用品、農機具そして茨城廃寺跡、常陸国分僧寺・尼寺跡、常陸国国衙跡、鹿の子遺跡から等の出土品やその他展示されます。尚、雛巡りの時には一緒に是非お勧めしていました。尚、雛巡りの期間中は月曜日他は開館していましたが終了後は金、土、日、祭日の開館になっていきます。

・花はまだかいな

梅の木にうぐいすひとり

ちき

マカオに夢広がる

小林幸枝

八月二十日〜八月二十四日の日程で「二〇一二年・日本芸術文化の祭典 in マカオ」への出演が決まった。ことば座をスタートさせて、今年が六年目となります。三年の第一ステージ、五年の第二ステージ、そして今年からは七年に向けての第三ステージに入ります。

第一ステージでは、オカリナの野口さん・矢野

さんとの出会いを創ることが出来、第二ステージでは、モダンダンスの柏木さんとクラシックギターの大島さんとの出会いを創ることが出来ました。特に柏木さんとの出会いは、石岡から一気にマカオの舞台へと導いていただき、大変感激しています。

ステージをステップアップすることに私の舞いもステップアップしているのかなと思っただけですが、どんな評価を頂けるのか気持ち揺れます。白井先生にそんなことを言ったら「人の言うこと、評価なんか気にするな、自分が一番だと思っっている」と怒られてしまいますが、なかなか自分が一番だとは思えないものです。

でも、柏木さんと同じ舞台に立たせてもらい沢山の刺激を頂きました。きっと以前に比較すると表現力が大きくなってきている思っています。

二月二十日に、柏木さんがピアニストの山本光さんを連れて、ギター文化館を見に来てくれました。白井先生と即興でコラボレーションをしてみました。一緒に舞台を作ればまた新しい世界が始まります。六月の公演では、山本さんのピアノで柏木さんの舞いが披露されるようなので、楽しみにしています。

楽しみと言えば、マカオの公演は六月公演の演目をそのまま持つていくそうなので、どんな本が出来上がってくるのか首を長くして待っています。常陸の国の舞い物語を海外の舞台で演じられるなんて考えてもいなかったもので、心はもうマカオに飛んでいます。

第三ステージの私には是非ご注目、応援よろしくお願ひいたします。

《特別企画》

虚構と真実の谷間

打田昇三

第四章 霧の中の栄光(1-3)

やがて坂上家の跡取り息子である田村麻呂も家業を継いだことになるが、祖父以前の商売「合戦屋」として一発勝負に賭けるのでは無く、父親の意思を継ぐようにして「陸軍士官学校」にでも入ったのである。青年期までの記録は無いと言われる。デビューしたのは成人式の後に数年経った頃らしいが、いきなり近衛府の将監(しようげん)に任じられた記録が有ると言う。将監は上級佐官であり、例えば常陸国府の事実上の国司より上の位になるから疑わしい。何の功績も無い兄ちゃんの任官は、いくら出世が早くても衛門府か兵衛府の尉官辺りが妥当であろう。それと、もう一つの疑問は此の時期に「坂上田村麻呂が清水寺を寄進した」とする噂である。坂上家が壬申の乱などで稼いだ金が有ったとは思いが信用できない。二十歳代の国家公務員が日本有数と言われ後世に残る壮大な寺院を寄進する?…従来から異説もあつたらしいけれども…実は、この寺院が最初に建てられたのは奈良に近い木津川の上流で、それが長岡京遷都の際に現在地に遷されたようなので、その時から「清水の舞台」が付けたら訳では無いと思う。桓武天皇の勅願所となつてから大きくなつていった寺らしいから、桓武天皇に忠節を書いた坂上田村麻呂も奉加帳には奮発して金額を書いた。本人が有名になつたから一人で奇進をしたように言われるだけのことで、その時代に寄付を取られた京都のオッサンたちは怒っている。

何も彼も坂上田村麻呂の手柄になつていようであるが肝心の「蝦夷征討」と言うか、東北方面侵略に際して本人が関わつた行動は、先に述べたように桓武天皇の延暦十年（七九二）正月早々に蝦夷地を攻める準備として、東北地方へ通じる地域の常備兵力及び主要装備、つまり出動させられる軍勢力を調査するために、何組かの調査団が東海道及び東山道に派遣された際に、東海道（伊勢國から常陸國まで）を担当したと思われる帰化人の百済王（ぐだらのこなきし）の副使になつたのが記録された最初である。

この時に蝦夷まで出撃したのか、又は調査だけで出陣は延暦十三年だったのか具体的な記録が無いように何とも言えないが坂上田村麻呂は手柄を立てたことになっている。その間に政府は蝦夷の勢力を弱める為に関東・北陸の民を九千人も蝦夷地の城砦に移住させており、これは軍備を増強したと考えられる。そして翌年の延暦十六年十一月五日に坂上田村麻呂が征夷大將軍に任命されており普通ならばその足で戦地へ行くのであるが、記録によれば四年後の延暦二十年（八〇二）二月二十四日に大將軍・坂上田村麻呂が「節刀（せつとう）」を授けられている。

節刀は中国の制度を真似たものだが、出陣する將軍に天皇の持つ軍事権を与える儀式であるから急を要する蝦夷出陣に際しては、征夷大將軍に任命されるのと同様に行われなければ意味が無い。二月に節刀を受けた田村麻呂は、その年の九月二十七日に「蝦夷を平定しました」と報告しており翌年の正月早々には陸奥膽（胆）沢城を築いて多賀城から鎮守府が移つていて、どうも此の辺りの記録がはつきりしないと言うか嘘っぽい。

田村麻呂に関わる有名な話は部下と共に降伏してきた大墓公阿弓流為（おおはかのきみあてりい）と盤具公母礼（いわぐのみみれ）と言う蝦夷の代表者二人を都まで連れて来たことである。それが胆沢城の築かれた年の初夏と記録されており、田村麻呂は朝廷に二人の助命を申し入れた。これは帰順策で蝦夷地を治める建言であつたらしいが無能で阿呆で無責任な公家たちが、田村麻呂の提言を危険視して頭から否定し、二人を斬つてしまった。この話は田村麻呂が慈悲深い將軍であることを示すように伝えられているが、良く考えると首をかしげたくなる点が無いでもない。

伝説によれば、京都郊外山科にある將軍塚古墳が田村麻呂の墓とされていて、第二次大戦中にはその山に高射砲の陣地が築かれることになり地元の人たちが作業に駆り出された。その際に大きな石棺に埋葬された人骨があり、それが六尺（一・八〇）近い大きさであつたとする目撃者の談話がNHKの「日本史探訪」を再現した本にある。

田村麻呂は身長五尺八寸、胸の厚さ一尺二寸の偉丈夫、筋骨隆々たる人物で目は鷹のように鋭く金色の髪で赤ら顔「勇力人に過ぎ、將帥の量あり」と言われていた。その人物が、朝廷の難事業であつた蝦夷征圧を成し遂げ、戦塵に日焼けした姿で帰つてきた。その姿は、宮中でチョロチョロしていた柔弱な公家から見れば鬼のようにも見えるものであつたらう。それなのに自分が助命を受け合つて遙々と連れて来た阿弓流為と母礼の二人を公家どもの主張で助けることも出来なかつた。約束を破ることになつたのである。

「ガタガタ言うならてめえらで蝦夷へ行け！」と啖呵を切つて自分の主張を通すことは出来た筈

なのにそれをしなかつた。征服者の側からみれば蝦夷の指導者二人が処刑されたことで大和朝廷による蝦夷征圧が曲りなりにも成功したことになるから、人としての信義には背くが阿弓流為、母礼の排除に坂上田村麻呂が貢献した功績は大きい。つまり、この人物は英雄でも立派な武將でも無くて偶々、平安時代に東北地方の平定に成功した官僚に過ぎなかつたと思うほかはない。

阿弓流為と母礼の助命を受け合つたことから、坂上田村麻呂は単なる武將では無く、東北地方の農業開拓を目的に北方遠征を行った人物とする意見もあるようだが、開拓の目的が大和朝廷の繁栄にある以上は「侵略者」の域を出ないのである。

田村麻呂の姉と娘とが桓武天皇の後宮に入つていたと言われるから、坂上家は既に武門の系列から離れて藤原一族のように官僚化していた。そして桓武天皇の意図を体して行動した結果、坂上田村麻呂は「偉大な將軍」として後世に名を残すことになつたのであろう。そして、更に「坂上田村麻呂」の株が上がる出来事が宮中に起こる。大同元年（八〇六）三月十七日、平安遷都と蝦夷征伐に執念を燃やした桓武天皇は七十歳で世を去つた。死因は心身の衰弱、つまり、前に述べたように元氣の良い怨霊たちに眠りを妨げられたのが身体を弱らせた。特に外出先で雷雨に遭遇し、大木が折れて下に居た牛が死んだのを目撃してから調子を悪くした。天皇は丑年生まれだといふ。

遺言により皇后・藤原乙牟漏との間に生まれた嫡男の安殿親王が跡を継ぎ、平城（へいぜい）天皇として即位した。皇太子には同母の弟で十二歳下の賀美能（かみの）親王が当てられた。安殿親王は皇太子時代が長かつたけれども、皇太子妃には桓

武天皇擁立に貢献した藤原百川の娘・帯子が選ばれていた。しかし早逝していたので、百川の兄・清成の孫（桓武天皇の権臣・種継の娘で一族に嫁した薬子が生んだ娘）が後宮に入ることに母親の薬子も付いて来た。そこ迄は良かったのだが、この薬子が大物で自分の娘の世話を焼きながら、序に皇太子の安殿親王と親密過ぎる関係を作ってしまった。是を知った桓武天皇は激怒し、宮殿から薬子を追い出していたのである。

その桓武天皇が死んだ際には、さすがの安殿親王もショックで起き上がれず、坂上田村麻呂が介添えして葬儀など諸行事を無事に済ませている。一族からも皇太子の後宮に入った女性がいたようなので、田村麻呂は素早く次の天皇となる皇太子に近づいたのである。ところが、桓武天皇が追い払った薬子が、天皇の死を良いことに皇太子に呼ばれて再び出しゃばってきた。兄の藤原仲成（長岡京で暗殺された種継の嫡子）も権力を振るい出した。受け入れるのが皇太子から昇格した平城天皇であるから、誰も意見が出来ない。宮内には薬子にかき回されて毒の渦巻く舞台になった。

ところが、その毒に当てられたのかどうか平城天皇の健康状態が思わしくなく、三年程で本人から退職の希望がもたらされた。当然ながら薬子と仲成は退位に反対したが、病状の悪化は如何ともし難く「退職願」が書かれた。どうも病氣の原因が桓武天皇と同じく強力な怨霊の所為だったらしく誰も待っていたことなので退位が喜ばれ、皇太子の賀美能親王が嵯峨天皇として即位した。

嵯峨天皇の即位は大同四年（八〇九）四月十三日であり、平城先帝は上皇としておとなしくしていれば良いのだが、現役時代に戻ったつもりで、「平

城京へ遷都しろ」などと命令したり、翌年には遂に「天皇に復職する」と言い出す始末で手がつけられない。全ては藤原薬子兄妹の差し金であるから、嵯峨天皇は女官としての薬子の地位を剥奪した。上皇は怒り、東国に行つて軍勢を集め嵯峨天皇に對抗しようとした。これを察知した天皇側は仲成を捕らえ、軍勢を差し向けて上皇の行く手を抑えた。上皇は已むなく平城京に戻り頭を丸め形だけは僧となつて希望もない日々を送った。これが弘仁元年（八一〇）九月に起こつた「藤原薬子の変」である。

薬子は、薬を使つたかどうか分からないが自害して、兄の仲成は斬られた。此の時に嵯峨天皇の命令で軍勢を指揮していたのが、何と数年前に桓武天皇の死で泣き崩れる平城天皇を忠臣として支えていた「坂上田村麻呂」なのであつた。：

公家たちが手を焼いていた蝦夷征伐を巧みな懐柔策で成功させ、それを土台にして桓武、平城、嵯峨の三天皇に仕え、機を見るに敏感で変わり身を素早くし時には相手を切り捨てても生き残る。

これが坂上田村麻呂の、強いては帰化人から宮廷貴族の仲間に入った坂上氏なのであろう。嵯峨天皇にしてみれば自分に皇位を譲ってくれた同母兄である平城上皇を武力で屈伏させることは辛い決断であつた。それを平然と実行してくれた坂上田村麻呂に大きな借りが出来た。この事件の後に体調を崩した田村麻呂は翌年の初夏に平安京郊外で五十四歳の生涯を終えたと言われる。その官は大納言に至り、嵯峨天皇は従二位を贈つた。武人としては破格の地位である。そして多くの英雄伝説が嘘か誠か、この武將に付会されたのである。蝦夷征伐という侵略行為で出世した人物のことに長

いページを割いたことをお詫びして、攻め込まれた東北地方はどうなったのか：騙されて斬られた阿弓流為と母礼の地盤であり、多賀城から陸奥鎮守府が胆沢城に移された関係もあるから代表として岩手県の状況を覗いてみることにする。

坂上田村麻呂が没した弘仁二年には陸奥国に新しく和我（わが）、稗縫（ひえぬい）、斯波（しば）の三郡が置かれたという。そして田村麻呂の後に征夷大將軍に任じられた文室綿磨（ぶんやのわたまる）という人物が、最後の蝦夷征討とも思える爾薩体（さつたい）、幣伊（へい）二村の攻略を行っている。文室綿磨は東北から戻り、やがて中納言になった官僚であり、將軍に任じられた際の職務は、かつて伊治皆麻呂の彼女を奪つて蝦夷地反乱のきっかけを作つた馬鹿公家の紀広純と同じく出羽安察使である。胆沢城を強化したり、既存の多賀城のほか志波城（盛岡）と徳丹城（矢巾）を築いたことなどにより、大和朝廷の「蝦夷征服事業」は一応の終結を見たようである。弘仁六年（八一五）には軍制が改革されて兵士、建児（こんでい）地方兵が東北方面の守備についた。以後の東北地方と言えは在地の豪族たちが関わり「源氏」が登場する「前九年の役」及び「後三年の役」に眼が向けられる。史書によつては「：坂上田村麻呂の善政によつて東北地方が落ち着いて：」いたように書いてあるが、これは嘘である。陸奥守、出羽守、鎮守府將軍、安察使、秋田城などを頂点とする大和朝廷の支配構造が変わらない限り、その下で領民は搾取と混乱と自然災害に苦しめられていたのである。その証拠に次々と騒動が起こる。記録は少ないのだが、清和天皇の貞観十七年（八七五）に出羽国での小さな出来事があつた。蝦夷と呼ばれた人々の

中で過激派のようなグループが大和朝廷に服属していた同族を襲撃して殺害したのである。追いつめられた縄文人の苦悩を思わせる事件である。この事件で一つ気になるのは都へ知らせたのが、筋違いの下総国司・文室甘楽麻呂(ぶんやのかんらまろ)という人物である。当時の下総国府は茨城県常総市石毛の鬼怒川畔に置かれていた。平将門が生まれた場所として知られている。東北地方の変事は現地の役人から東山道か北陸道を経由して都へ伝えられるのが筋であると思うのだが、なぜ下総国司が報告したのか…。

この事件の出典である「三代実録」によれば武蔵、上総、常陸、下野等から兵三百ずつを集めて救援に行かせる手配までしたらしいが実際には派兵出来なかったようである。下総国からの報告が届いたのは五月十日で、実はその前の五日に端午の節句でお祝いをしようと清和天皇も公家も楽しみにしていたところ、山陰地方から嫌なニュースが飛び込んできたのである。或る牛が犢(ごう)を生んだ。その犢は頭が二つ、身が一つ、三角の目が三つ、口が二つ、顔から背にかけて灰色であり、出産中に母牛が狼に襲われたため、親牛仔牛共に死んだ、という。これで節句の行事は中止。暗い雰囲気であったところへ、出羽の騒動が伝えられたから宮中では慌てたのだが、現地の方では寺が焼けた程度で、公務員に被害が無かったから「失政」を咎められることを恐れた役人が事件を伏せたのでは有るまいか：文室甘楽麻呂は、征夷大将軍だった文室綿麿に近い人物で現地の知人から得たニュースを都へ知らせて点数を稼いだのだと思う。嘘もいけないが事実の隠蔽は、なお悪い。やがて被害は蝦夷の人々だけと分かり、派兵が中

止になったと思うのだが、十一月に入ると多分、北海道に居た蝦夷が船八十隻を率いて出羽の大和朝廷占領地を襲い、二十数人の農民が殺害される事件が起こった。これが争乱再開の序章である。「天罰」と言うほどでは無くても、小さな事件の揉み消しを図った出羽国の役人たちは、僅か数年の後に秋田城下で起こった本格的な反乱に右往左往し厳しい現実で慌てることになる。

それは「元慶(げんきょう)の乱」と呼ばれる。坂上田村麻呂の鎮圧以来の本格的な「蝦夷と俘囚(ふしゅう)の反乱」であり、現地の官僚たちは、平素の無能と呆れるほどの強欲ぶりの報復を十分に思いついた。この場合「蝦夷」とは大和朝廷に北方へ追い込まれた日本列島先住民族全部を指しているが、「俘囚」とは、その中でも致し方無く降伏して大和朝廷の支配組織内に組み込まれた人々のことを言う。つまり「無道な抑圧に人は心底から靡かない」ことの証明である。

陽成天皇の即位二年目、と言っても八歳で即位した翌年であるから摂政の藤原基経(北家・房前)から数えて六代目、清和天皇の生母・明子の兄が政務をみていた。基経は、菅原道真を陥れた藤原時平の父親である。尤も小学生で即位した清和天皇の代にも基経の先代の良房が摂政を務めていたので、この頃は完全なる藤原政権時代である。

陽成天皇は源頼朝らの始祖と言われながら数々の奇行で知られた(乳母を殺害し、小動物を殺し、宮殿内で馬を飼い、それを乗り回すなど)為に、子孫が一代繰り上げて「清和源氏」にしたと言われ、中学を卒業するかしらないかで、さっさと退位しているから、東北方面でのような騒ぎが起ころうとも桓武天皇のように苦勞しなくて済む。

出羽国は本来ならば国主の出羽守が「介、掾」以下の役人を率いて統治に当る(常陸国とは違いう大和では無いので「大掾」は居ない)のだが坂上田村麻呂らの制圧以降、秋田城が防備の拠点となり、その城主として次官の出羽介が兼任配置されるようになっていた。これをば「秋田城介(あきたじょうのすけ)」と言い、必然的に絶大な権力を握るようになったのである。当時の城介が、模範的な悪玉であつたらしく、住民を「胡麻」か「菜種」と間違えて絞られるだけ絞った。元慶の乱を伝える記録は「三代実録」であるがこれを説明した史書は多くはない。岩手県史、秋田県史、武家屋敷で知られた角館近辺にあつた仙北平野に位置するある村(現在は仙北市に合併された)の郷土史や歴史年表などを参考に推測してみると騒動の原因と乱の概況は、次のようなことである。淳和天皇(嵯峨上皇)時代の天長七年(八三〇)藤原兼子の変の二十年後に秋田地方は新年早々の大地震に襲われ、死傷者が百名を越えた。その上、伝染病が蔓延して多くの病死者が出た。各地に地割れや崩落が生じ秋田城や役人の官舎、寺院などが倒壊した：(役人のことは、どうしても良いのだが朝廷への報告に、そう書かれていた)住民の被害は死傷者のほか田畑の損傷、河川の堤防の崩壊による水涸れなど、農作業への影響が大きかった。それでなくても、この時代には凶作が続き、嘉祥三年(八五〇)にも出羽国に大地震があつたから、油の絞りカスのような住民は、どうして良いか分からない。そういう状況下でも、秋田城介は僅かばかりの減税をしただけで、壊れた印刷機のように「納税告知書」だけを刷って農民に配布して寄こすから、呆れ返った農民は、国定忠治のセリフのように「縄張りを捨て故郷を捨て：」て

逃げ出し、後に残った我慢強い人たちは、一致団結して元慶二年（八七八）三月に悪代官ではなく、その上司である悪城介への抵抗運動を起こしたのである。

まず、農民たちが要求したのは「取り立ての厳しい大和朝廷の支配下からの分離独立」である。侵略される以前に穏やかに暮らしていた時代に帰して欲しい」と言う要求であるが、長良川の鵜が鵜匠に釈放を要求するようなもので、許される筈が無い。それならばと、食べる物を要求したのがくれる筈も無い。そこで集団が狙うのは食糧が不正に備蓄された場所であり、該当するのは秋田城であるから、必然的に狙われたのである。

聖武天皇から宇多天皇までの時代を記録した通俗史の「前々太平記」には、出羽国司の藤原興世（ふじわらのおきよ）と言う人物が、陸奥国司になりたかつたのに出羽へ配置された不満から法を厳しくしたために反乱が起きたように書いてあるけれども、これは完璧な「嘘」であろう。この人物は反乱鎮圧に出動して、幾らも戦わないうちに戦死したから責任を押し付けられただけである。東北地方は陸奥国と出羽国に分かれるが、出羽は越後に至る北陸道から分かれた地域で、初めは陸奥国に含まれていたらしいから、分離独立した後でも陸奥国の下に見られたらしい。

秋田は城主が強欲な割には城の防備が手薄であったから反乱軍は城内から武器と食糧を奪い一次的だが独立を勝ち取った。五月に出羽権守（副国主）に任命された藤原保則は湯沢辺の雄勝城を拠点にして、蝦夷の民同志を牽制させる作戦を展開し、先ずおとなしくしていた蝦夷の人々に備蓄の米を放出させた。米が配給されれば暴れる理由は無い

から、両軍とも疲れていたこともあり九月頃には自然に反乱も収まったようである。

こういう人物だけを要所に配置しておけば地方も安定するのだが、昔も今も政治は中央だけのものとなり、地方は忘れられる。この年の正月には、公家たちが協議をして平安京の二か所に備蓄していた政府の米を、販売所を設けて売っているのだが、これがどういう趣旨で行われたのかは不明であるけれども京都には売る米があつて、生産地の秋田では飢えた農民が食糧を求めて暴動を起こす：近代でも根本的な物資不足で敗戦を迎えた昭和二十年からは都会の人たちが農村地帯へ闇米の買い出しに出掛けた。しかし統制が厳しく摘発が頻繁に行われた。常磐線や東北本線などの終点である上野駅での一斉検挙が多く、当時は「日本で一番に米がとれる場所は上野駅」と言われていた。

これも、政府がその根元を正さずに末端の取り締まりだけを強化していたことの歪み現象なのであつた。いずれも当時の社会が正常では無かつた証拠であり、政治は「嘘」で固められていた。

奈良時代から平安時代にかけて東北地方で起こつた争乱は単純に「蝦夷の反乱」として扱われるようだが、坂上田村麻呂や文室綿麿が征圧してからは制度の改革などもあつて、抑え付けられる住民側にも長引く戦乱と郷土の荒廃に嫌気がさし、先ず太平洋側の奥羽地方では平穏な時期があつたと思われ。それに対して、日本海側の出羽国では行政のトップに居た官僚の野心や欲望が絡んで幾つかの事件が発生していたのである。

やがて元慶の乱のあと、出羽国の騒動も収まり東北地方は安定したようだが、約六〇年後に常陸国で平将門が本格的に暴れ出した天慶の乱（九三九）

が起こると、これに刺激されたのか、またも秋田城の周辺で反乱があつた。この時の原因も元慶の乱の場合と同じ様なもので役人の横望に対する反発が原因であるが、此の場合は珍しく秋田城主が「悪い」と認定されて懲戒処分を受けた―何もかも地元に住む蝦夷や浮囚が悪い、として「嘘」で固めてきた政府の方針が変わってきたことになるが、その背景には、反乱の鎮圧に協力をしてくれた地方豪族たちの存在を無視できなくなった事情があると睨んで間違いはあるまい。

人類が狩猟採取の暮らしから農耕生活に移つた時代の犬は群れることなく単独で暮らしていたらしいが、大規模な狩りをする場合だけは、主権犬が遠吠えで仲間を募集して一致協力のもとにプロジェクトを完成させるのだと聞いたことがある。参加犬は肉の報酬を貰って解散し、孤独に戻る。

人間は犬ほど進歩して居ないのかどうか、何かと言うと群れてはボスをつくりたがる。犬のボスは獲物の肉を余計に喰うぐらゐの恩恵であろうけれども、人間界では多大の特権がボスに与えられるから、その勢力は強大になる、と言うが、この話が「嘘」かどうかは犬に聞いて貰うしかない。

一応は戦乱が止んだ東北地方を大雑把に分けてみると、先ず太平洋側の陸奥国では青森地方を含めて従来から各地に定着していた首長たちが西暦九百年代には消滅し、朝廷側の下級官僚（郡司など）に登用されていた「安倍氏」の勢力が急速に増大してくる。そして日本海側の出羽国では選任された浮囚主と言いながら、天武天皇の後胤である清原夏野（親王任国制を実現した高級公家）の系統を自称する「清原氏」が、揺るぎ無き豪族として現地に君臨するようになっていた。

このシリーズの第二章で述べた「平将門事件」が終結した天慶三年（九四〇）から凡そ一一〇年間は東北地方に起こった事変の記録は無い。その間の特徴としては、西国を中心にやたらと海賊が出没していた。また京都や近畿地方では、盗賊が増えている、中には徒党を組んで城に立て籠るなどしており、その討伐に当る「武士」らしき職業も大繁盛をしていた。その為に「御伽草紙（おとぎせうし）」で知られる「酒呑童子（しゅてんどとうじ）」の一味を退治した（と、伝えられる）源頼光など清和源氏の一族が、かつての坂上田村麻呂や文室綿麿などに替わって登場することになる。酒呑童子が征伐された場所は京都府の日本海側にある丹波の大江山とされているが、一説では名所・嵐山の五、六キロ南を横切る国道九号線（山陰道）沿いの

大枝山だとも言われており、こちらの方は伊勢神宮の御神体である八咫鏡（やたのかがみ）巨大な鏡の意味が最初に祀られ、聖なる巫女さんの皇女に護られていた場所として、何か神様が絡んだ裏話が伝説に変わる可能性がある。（現在は丹波の大江山麓が伊勢神宮の故地とされているようだ）大枝山説が真実となれば酒呑童子の話も怪しくなってくる。武士として売り出す源氏のコマーションルに思えないこともない。その頃は、世の中を勝手に自分の世の中にした藤原道長の全盛時代であるが、道長が死亡した翌年の長元元年（一〇二八）に、ほぼ百年ぶりに東関東で起きたのが「平忠常の乱」である。「乱」が付くと当事者が悪人と決めつけられてしまうから「正当性」が有っても単なる権力への抵抗と看做される。この事件も「なぜ起きたのか！」真相が今一つハッキリしない。「平忠常が権力を欲しいままにした」と言う理由らしいが、それならば「御

堂関白」などと称された藤原道長などは「極悪人」に指定されなければならない。

平忠常は、後の世に源頼朝の再起に当り大軍を率いて味方し多大の貢献をした千葉の豪族・上総介広常や千葉常胤の祖先であり、平将門の孫（母親が将門の娘になる人物である。祖父も父親も武士として知られていたから、忠常も上総、下総の在地役人として勤務しながら地盤を広げていて常陸国内にも領地があったように思われる。乱が起こる何年も前に常陸介として赴任してきた源頼信は現地で威張っていた平忠常を牽制するために、常陸国府の判官職であった大掾維幹（将門の乱の後に貞盛から領地を貰った繁盛の子）に数千の兵を出動させた。忠常は、その勢いに怖れを成して頼信に降伏し、家来になったのである。

源頼信には服従しても、他の上司に従うとは限らない。その後、頼信は他の国司に転じ、忠常は現地に留まって勢力を伸ばし、中央の命令に従わなくなった。当時の世相は、一部有力者の独裁に対する反発から地方の国司たちが中央へ収める税（貢物）を拒否する風潮にあり、特に関東では、後に武士団となる豪族たちの力が増して、統制に従わず、武力で争いを繰り返す者もいた。国司は、その対応に苦慮していたのである。下総、上総両国には、平忠常が父祖から譲り受けた領地も多かったから、税の督促にやってきた国府の役人が叩き出されたのかも知れない。偉そうに命令した国司もゴキブリ並みにやられた。税も取れず、面子を潰された官僚の立つ瀬が無いから「謀反」と報告するしかない。

平忠常の乱を記載しているのは、芥川龍之介が広めたような平安時代後期の説話集「今昔物語集」

である。ところが、そこに書かれている内容は大江山の酒呑童子伝説と同じように、当時・売り出し中の源頼信が常陸介として勤務していた時に、自分の命令に従わなかった平忠常を、大掾職の平維幹らの軍勢を従えて退治しようとした、すると、威張っていた忠常が頼信の威勢に屈伏して降伏した、という源氏向けの礼讃記事にしか思えない内容である。争乱の発生を記録した年表などを参考に辿ってゆくと、今昔物語の「源頼信朝臣、平忠常（常）を攻めし語（ものがたり）」の記事は源頼信の常陸介在任中であつた出来事と、何十年も後に、地元の武士（豪族）として押しも押されぬボスになった平忠常が起こした反乱とが混同して書かれていることが分かる。そういうこともあるので、「大掾氏」と言えば眼の色を変える石岡の為に、地元にはもう少し詳しく事件の内容を留めて置いて貰いたいと思うのだが、「茨城の歴史」にも「茨城県の歴史」にも「平忠常は：勢威をふるった」としか書いてない。石岡市史などは、もつと事務的に「平忠常の乱起こる」と、そっけなく記録しただけである。詳しい記録が残されていないならば、その歴史が「嘘」か真実かの見分けがつかず、怪しい憶測だけが誠しやかに残るだけである。

長元元年（一〇二八）六月二十一日に東国から「平忠常の反乱」を告げる知らせが届いた。久しぶりの事件で嬉しくなった公家たちは、直ちに檢非違使庁の判官職に居た平直方と、法律専門の官吏である中原成道の兩名を「追討使」に任命し、二百人ほどの家来を付けて「後は行く先々の国で兵士を集める」という無責任な命令で派遣した。それも、あれこれと手続きやら記念式典やらで遅くなり都を立つたのが八月に入ってからである。

本場・東国の暴れ武士が暴走し始めた事件を鎮圧するのに、警察官僚が率いる二百人の手下と、途中の国から借りてきた、やる気の無い兵士の集団で遅刻したのでは上手くゆく筈がない。乱の鎮圧は最初から無理であった。然も、途中で報告を怠ったとして中原成道が役を解かれたから平直方は苦境に立たされたのである。長元三年九月二日に政府は甲斐守に任命したばかりの源頼信を急遽常陸介とし兼ねて追討使に指名して、平直方を都へ帰させた。功名を立てるチャンスが到来した訳であるから普通ならば喜び勇んで出かける筈なのに頼信は慌てなかつた。新任地の甲州では無く、不可解なことに京都に居たままであったらしい。翌年の春には、やっと重い腰を上げて甲斐の国へやってきた。

すると暴れ放題であった平忠常が、どういうことなのか白旗を束にして降伏してきたのである。これは、頼信が常陸国府から出陣した昔の時点で「平忠常が源頼信の由来になつていたから」とする意見が強いようだが、そればかりでは無くて何か怪しい裏事情があつたのかも知れない。ともかく、忠常は「自首した捕虜」と言う立場で重い病気になる、あつさりとして死んでしまった。この事件は一件落着き良く考えようと、坂上田村麻呂のように美味しいところを頂いたのは源頼信だけ、というようにも見える。何か「嘘」が隠されているように思うのだが見付からないのは残念である。藤原政権が源平両氏を上手く使い分け双方を競わせて汚れ仕事をさせるようになる時代Ⅱ保元の乱、平治の乱に始まる源氏と平家が競い合う「源平時代」が到来するのは、それから凡そ百数十年の後である。平忠常の乱が有つたこの時代には、

未だ源氏と平家とが婚姻などを通じて微妙に繋がっていたらしい。蟹の市場では無いから源氏と平家が混同しても構わないのだが、これを興味本位で探ってみると面白い。

まず、平忠常の乱で株が上つた源頼信は、酒呑童子征伐の伝説を持つ源頼光の弟であり頼朝の五代前の祖先になるのだが、妻は中納言であつた平惟仲（たいらのこれなか）の娘とされる。惟仲は桓武平氏高棟流（平国香の父・高望王より早く臣籍に降つた系統）の五、六代目に当る人物であり、父親は珍材（はるき）と言う文字通り珍しい名前、惟仲は父や弟の生昌（なりまさ）と共に一条天皇の皇后（藤原定子Ⅱ清少納言の主心）が藤原道長の野望で苦境に陥つている際に、これを助けている。そして余計なことだが惟仲の従兄弟の孫は紫式部の娘と結婚した。一方、軍人ではなく警察官僚なのに東国の戦場に駆り出され、戦果を挙げることが出来なかつた平直方は、裏の事情を知らないから、自分に代わつて平忠常を屈伏させた源頼信を必要以上に尊敬してしまつた。その直方は、このシリーズの第二章に登場して貰つた平国香の嫡男・貞盛の曾孫に当る人物である。平貞盛は自分の甥などが必要以上に集めては養子にしたよう、パソコンを使わないと整理出来ない程に子供が居たらしい。その中で日本外史には「…貞盛四子あり…」として勇猛な末子の維衡（これひら）ら数名を挙げており、維衡が平清盛の祖先になる。その兄の維将（これまさ）は紫式部の伯母か叔母を妻としており、その間に生まれたかどうかは知らないが維時という人物が居て、その維時の子が平直方である。

少し話がややこしくなるが、平直方には姉か妹があり、その女性が結婚した相手と言うのは石岡

市史の下巻「常陸大掾氏の発展」に平維幹らの成り金ぶりを示す「宇治拾遺物語」の紹介記事に登場する高階成順である。当時は「一夫多妻の時代であり石岡市史には書いてないけれども、この時の高階成順の妻（常陸国へ連れ去られた娘の母）は「いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬるかな」の歌の作者・伊勢大輔とされている。

「嘘」がテーマであるこの章に、古代の貴族や武士の家系を紹介しても意味が無いのだが、実は平氏とも縁があつた高階氏には「絶対に隠さなければならなかつた“嘘”が漏れて公然の秘密」になつていたことがある。高階氏は一条帝皇后の母親である貴子の実家であり、本来は長屋王（天武天皇皇子）の家系なのだが、幾つかの系統に分かれて途中から地方官僚となり、或る事情から、村上天皇の時代に大歌人として知られた在原業平（ありわらのなりひら）を父とする人物が高階師尚（たかしなもろなお）として継いだのである。伝説的な歌人として筑波山麓にも言い伝えを残す「小野小町」と「六歌仙」に挙げられる在原業平は、平城天皇の孫で母親は桓武天皇の娘という身分で臣下に降つても近衛中将などの頭職に居たのであるが、現代で言えばプレイボーイとでも言うか風采が良く、頭は良くなかつたが、歌だけは達者な人物として知られていた。その業平が、とんでもない女性に子供を生ませてしまつた。その女性とは、文徳天皇皇女（清和天皇の姉）の恬子（やすこ）内親王である。問題なのは恬子さんが、伊勢神宮に奉仕する「斎宮（いつきのみや）」であつたことで、この職に就かされた女性（主に皇女があたり）は退職しても、修道女のような生活を続けなければならない。斎宮には長官以下大勢の公務員が斎宮寮（さいぐう

りょう)に付いて奉仕している。その淵源は先に述べた豊城入彦命の妹である豊鋤入姫命が伊勢神宮の出来る前に、何処かの山麓で八咫鏡を祀っていたことに由来するのである。

業平と恬子齋宮は前からの知り合いであり業平が公務で伊勢に行った際に、ついでに余計な事を仕出かしたらしい。「神に仕える聖女の妊娠」という教典に無い出来事に慌てた関係者は「何事も無い」と言う「嘘」を構築し、齋宮寮の中で出産をさせ生まれた子は高階邸に引き取られた。このことは絶対に秘密にされて、清和天皇さえも知らなかったらしい。恬子さんは出産後もケロリとして相変わらず「齋宮」の職を定年まで勤めたようなので、この秘密は漏れずにいたらしいが伊勢の神様は御存じであったかどうか：妙に几帳面な性格の書記が残していた記録が後の世に現れ、この世紀の「大嘘」は世間に知れ渡ることとなった。歴史上の「嘘」は大部分が顔をしかめるような内容であるけれども、こういう「嘘」は怒れない。

平忠常の乱で辛い思いをした平直方との関わりから脱線した話を戻すと、乱の始末をしてくれた源頼信の武勇に感服した直方は自分の娘を嫁がせる相手として頼信の息子・頼義を選んだ。頼義も父親と共に乱の平定に当たったようで、功績として「小一条院の判官代」という職を与えられた。小一条院というのは、第六十七代・三条天皇の嫡子・敦明(あつあき)親王のことで、皇太子に立てられながら、藤原道長が自分の孫を即位させるために圧力をかけて「皇太子返上」をさせられたのである。その見返りとして小一条院という名と屋敷と家臣と封禄を貰っていたものであり、そのほうが、天皇で苦労するよりは良かったと思われる。

「判官代」は太上天皇や女院などに仕える役所の次長兼監察官のような職で地方国司級の地位を与えられる。源頼義が平直方の婿に選ばれた際には、その職に就いていたのであろう。頼義は武士としても弓の名手、それも弱い弓で猛獣などを倒すことで知られていた。清和源氏の源頼義が、桓武平氏の平直方の娘を妻として二人の間に生まれたのが源義家であり、父親が八幡宮に詣でて、剣を授かる夢を見て授かった子というので「八幡太郎」と称した。当時の結婚形態は女性を基準にしていたようで、この場合も平直方が源氏から婿を迎えた形になる。平直方は、中途半端ではあったが公卿として京都にいたけれども、本来の領地は「鎌倉」近辺に広がっていた。そこで婿の源頼義に鎌倉の領地を譲ったのである。頼信が平忠常の乱を平定した際に東国の武士団を統括したこと、頼義が鎌倉に定着したことで、それ以来、源氏は東国に根付くようになった。例えば、後三年の役で右目を射られながら戦った豪勇の鎌倉権五郎景正など、直方に仕えて鎌倉に土着していた有力な平家の武士たちも婿殿の頼義に付けられたようである。鶴岡八幡宮は源氏の氏神として知られているけれども、これは源頼義が平直方の婿になってから京都の石清水八幡宮(源氏の祖・清和天皇が造営を

勸請してきたものであり、全国に八幡宮が多いのは後に頼朝が天下を取り、諸国の武士がゴマ摺りで自分の領地に八幡宮を建立したためと考えられている。神を祀るのに損得勘定で動くのは良くないが、源氏の武將が平家の婿になったことで、鎌倉という要害の地が平家から源氏に渡された。これが後代の歴史に大きな影響を与えるのだが、問題にされていないのが何とも不思議である。

多くの人々は、鎌倉が最初から源氏の地だと思っ込んでいる。これも歴史の「嘘」と言いたいだが、平直方のことを歴史的に重要な人物であると気づかなかつた我々が悪い。尤も源氏と平家が潰し合いをする分かつていけば、直方さんも鎌倉を手放したりはしなかったと思う。平直方の婿となった源頼義は小一条院の判官代としての働きを認められ相模守に任官した。団子屋のおやじが小麦畑を貰ったようなもので、鎌倉で威勢を張るには言うことなしである。さらに常陸介(事実上の国司)にも任命されたから一段と箔が付いて、東国の武士団に君臨し確たる地盤を築いた。最初に述べたように「英雄が天下を制するには地形が大事」と主張した頼山陽の説では鎌倉が重要なのである。

大阪近辺を発祥の地とする清和源氏の源頼義は、その説を先取りして舅の平直方から譲られた鎌倉を拠点にした。そしてその頃、久しく平穏が続いていた東北地方では、浮囚の長として大和朝廷に帰属していた「安倍氏」の勢力が急速に増大していた。同じ東北でも日本海側の出羽国では奥地で蝦夷の人々が小刻みな抵抗を続けていたが、太平洋側の陸奥国は平穏が続いていたが、それを抑えていたような阿倍氏が強大化したのである。支配者にとっては由々しい問題になり永承六年(一〇五二)「前九年の役」が始まる。日本外史には「是時に当りて陸奥の豪傑安倍頼時、諸部落を併せて、六郡の酋長となる。国守、秋田城介と兵を合わせ之を伐つ。頼時、逆へ(むかへ)撃ちて大いに之を敗る」とあり、平将門事件と同様に攻撃された安倍頼時の軍が勝ってしまった。こうして歴史の「嘘」が正当化された事件がまた起こり、源頼義らが介入してゆくののである。

【風の談話室】

まだまだ寒さは続いているが、陽の沈みは確実に遅くなり、また口中の風も硬さが取れて温んでいる。

「雑木林を抜けると春が居た」そんな詩を呟いたのは随分前の事であるが、寒さの厳しかったこの冬は、こんな詩が切実に感じられる。

例年に比べいろいろなものの春の音や色が遅れてやってくるが、その分だけ春を褒める喜びが強いように思える。良い春がやって来たよ、と大声で叫ぶ春になつて欲しいものである。

《ヨイシヨ広場》（陸平をヨイシヨする会）

沖縄の風に吹かれて（2） 田島早苗

沖縄戦の一端に触れた胸の昂ぶりを抱えたまま、沖縄そばの昼食体験に出かけた。小麦粉100%の麺は私の好みではなかったが、家族連れで賑わっている店の雰囲気は良かった。

昭和二十年四月一日、アメリカ軍は沖縄本島中部の西海岸に上陸「鉄の暴風」と呼ばれた九十日の猛攻撃は島々の山容を変え、文化遺産のほとんどが破壊されたという。

「摩文仁の丘」には、日本軍最後の司令部があり、追い詰められた日本軍の兵士や住民が最後にたどり着いた場所だった。昭和二十年六月二十三日、牛島司令官の自決により二十数万人の尊い命を奪った組織的な沖縄の戦闘は終わった。

広大な平和記念公園内に、平成七年（一九九五）世界平和を願って「平和の碑」が作られた。整然と並ぶ黒い石には、国籍や軍人・民間人の区別無

く、沖縄戦などで亡くなられた二十四万人の名前が刻まれていて、全国各地から肉親の名を探す人の訪れが絶えないという。沖縄では六月二十三日を慰霊の日と定め、沖縄の全戦没者追悼式が行われている。

二〇〇〇年四月開館した「沖縄県平和記念資料館」は沖縄情緒たっぷりの屋根を持つ大きな建物で、館内には沖縄戦争の悲惨さを見て考えさせられる様々な展示の工夫がなされている。残念ながら友と見学のテンポが合わない私は、たちまち独りぼっちになってしまい、落ち着いて展示を見るゆとりもなく、友の姿を求めて館内を歩き回るばかり、心残り一杯の平和記念公園見学になってしまった。

夜には琉球料理を味わいながら琉球舞踊を見る楽しみが用意されていて、琉球王国時代の華やきを垣間見ることが出来た。

ツアー二日目は心配された天気も上々、増尾さんのピースポット仲間と「日本から基地をなくす草の根運動」の代表として活躍されている方の、筋金入りの説明と案内を頂き、別のピースポット仲間二人の優しい気配りも嬉しく、少し緊張して基地巡りに出発した。

世界一危険な基地と言われる普天間基地周辺には、九万人の市民が住み、百二十一ヶ所以上の公共施設があるという。その繁華街のご真ん中を、基地のフェンスが長々と貫いている。「黄色の線内は日本からの提供施設、許可無くはいると罰せられます」フェンスに下げられた入場禁止の看板に心が寒くなる。

基地のフェンスすれすれに普天間第二小学校があり、その日はちょうど楽しみ会が開かれていた。

広い会場一杯に父母、祖父母の姿が溢れ、次々に日頃の成果を発表する子供達に惜しみなく拍手を送っている。子どもの頃の学芸会を思い出させる心温まる風景だった。それにしても飛行機の飛ぶ音は聞こえなかったと思ったら、催し物がある時や、日本から要人が来島したときには、出来るだけ飛行機を飛ばさないようにしているとか、実際の轟音を体験してみたかったとは、部外者の驕りだったかも知れない。

食事をとる時間を惜しんで、用意して頂いた弁当をバスの中で食べながら、嘉数高台公園に向かう。この公園の高台は、第二次世界大戦末期の昭和二十年四月「沖縄戦最大の激戦」と呼ばれる過酷な戦いの舞台となった地で、百段近くある急な階段を上った展望台からは、普天間基地の全景や、米軍が上陸した北谷・嘉手納・読谷の海岸も望むことが出来ると言う。残念ながら、喘ぎあえぎ上った最後尾の私は、ゆっくり全景を眺める時間も無く、すぐに降りるしかなかった。

二〇〇四年八月、住宅や公共施設が密集する場所に隣接する基地の危険性を象徴するような事件が発生した。沖縄国際大学に米軍のヘリコプターが墜落、幸い夏休み中だったので犠牲者は出なかったが、素早く米兵による現場封鎖がなされ、日本の警察や学長さえも立ち入ることは出来なかったという。今は後者も建て直され、唯一本残っている焼け焦げた木に惨事を偲ぶばかり。車窓から別れを告げて普天間基地移設問題で揺れる辺野古へ。

高速道とはとても信じられない緩やかな速度のバスに揺られ、基地問題について熱気溢れるレクチャーを受けながら、思いは緑豊かな山々と珊瑚

の海に抱かれているという、辺野古・大浦湾に飛んでいた。

辺野古への普天間基地移設計画については、新聞・テレビの報道で関心を持っていたが、現地に足を運んで見てそのギャップの大きさに驚いている。テントを張り、基地移設反対の座り込みをしている人々から発している静かな熱気に気圧されて、言葉を掛けることも出来ず、テントの中の売店で「本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること」という長い題名の本を買った。

私と同じ岐阜市に生まれ、沖縄に移住して基地問題に出会い、いつの間にか反対運動にのめりこんでしまったという女性の説明を、基地を取り囲むフェンスの側で聞いた。フェンスにジュゴンを守るうと魚を横つたビニールのテープを張ったり、ぬいぐるみをぶら下げたりして基地反対のメッセージを発信しても、一晩で取り払われてしまうとか。「この先は米軍のシユワブキャンプ内なので、日本人は許可無く入る事は出来ないのです」と言われ、辺野古に米軍のキャンプがあることさえ知らなかった事を恥じ入るばかり。

珊瑚が育ち、ジュゴンの好物のウミヒルモ等の海藻類が藻場をつくり、珊瑚礁生物のオアシスになっている大浦湾には既に埋め立ての爪痕がつけられ、碧い海が壊されていくのを目の当たりにしている現地の人々の焦燥感が伝わってきて、砂に足を取られながら、声もなく碧い海をのぞき見るばかりだった私。

帰路、二〇〇二年四月にオープンした「道の駅かでな」の四階眺望デッキから嘉手納基地を見る事が出来た。三七〇〇坪の滑走路が二本、面積は約二〇平方km、海外最大のアメリカ空軍基地と言

われるこの土地の九割は、元々民間人の所有地だったのを、戦中戦後に掛けて米軍に強制接収されたのだという。基地の囲いの中に野菜畑があった。「住民が勝手に栽培しているが暗黙に了解されている」と聞いて、住民のささやかな抵抗に拍手。

基地巡りで抱えた複雑な思いを振り払うようにホテルの食べ放題飲み放題の夕食を楽しみ、更に「鳩間島」という民謡ライブの店へ出かけた。急な階段を上ったところにある小さな酒場だったが、まるで貸し切りのように数々の島唄に聞き惚れ、その内に衣装を借りて踊り出す仲間もいて、広くない酒場の中は喧噪に包まれた。最後はみんなが手振り足踏み、沖縄の夜の異国情緒に浸ることが出来た。

《ことば座だより》

ふるさととは物語

脚本・演出 白井啓治

今年は、6月、12月のギター文化館での定期公演に加えマカオでの「日本芸術文化の祭典」への参加出演がことば座としての大きな行事となる。ことば座を立ち上げるときに、公演は総て常陸国を主題としたオリジナル作品を行うとしたのであるが、かつて征服者が「常世の国」と表したに値するだけの物語の創造を内在させている事に驚かされる。ところがこの国に住む多くの人達が、物語じゃ飯が喰えんなどのことを言う。実に悲しいことである。

しかし、飯を食うためには物語の創造がなければならぬ。政治にしろ経済にしろその国の明日のビジョンとしての物語の創造がなければ成り立

たない。その内容がどんなものであるにせよ、そこに物語の種が散満してあるという事は多様な飯の種が広がって有るといふ事なのである。

小生は脚本家なので脚本としての物語を創造するのであるが、農業の人は農業の物語を創造し、商業の人は商業としての物語を創造すればよい。

地元の良さは地元の人には見えない、と言うがそれは間違いと言うべきであろう。地元の良さが見えないというのは地元を確りと見ないからである。三十数年以上も前の事だと思いが「隣の車が小さく見えます」というコマーシャルがあったけれど、隣の車が大きいか小さいかばかりを気にして車の買い替えばかりを思っている様では自分の良さを思うことは出来ないし、自分の物語を創造することは出来ない。

先月号にも少し触れたが、舞踏家の柏木さんより、ホルストが伊藤道郎のために作曲した「日本組曲」の事を聞かされ、この組曲に常陸国の物語を合体させて世界初の日本組曲を主題とする常陸国舞踏劇を創ってみたいと思っている。

足元をちよつと目を凝らして見たら実に沢山の物語が生まれ、愉快が生まれることがわかる。

梅と桜が同時期にみられる年になりそうです。
今年こそは、賑やかで愉快的な春を迎えられることを願うものである。(ひらち)

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館発：常世の国の恋物語百

2012年「ことば座」のご案内

ことば座も本年で6年目を迎えることとなり、ステージも第三段階に入ります。
5年間の中で大切な仲間の輪が出来上がってきました。
この大切な仲間たちと、大声で愉快の夢を紡いでいきたいと考えております。
どうぞ変わらぬ応援をよろしくお願いいたします。

2012年ことば座公演予定

4月8日:「美浦バレエ同好会発表会」への友情出演 美浦村中央公民館

6月15～17日:第23回定期公演 ギター文化館

8月21日:「2012年日本芸術文化の祭典 in マカオ」への出演

9月9日:第3回野口善広と白井啓治の「里山と風の声コンサート」ギター文化館

12月1～2日:第34回定期公演 ギター文化館

朗読舞劇団ことば座

〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

Tel 0299-24-2063 fax 0299-23-0150

朗読教室受講生募集!! あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか。

ことば座では、4月より「ふるりの物語や詩の朗読を楽しむ教室」を開講することとなりました。
朗読とは、演劇の一つのスタイルです。朗読台本となる物語や詩文をかりて自分の思いや考えを表現することです。ニュースアナウンサーのように聞きやすい標準の発音で読むことが朗読ではありません。
自分が表現したいという思いを、書かれた文章(物語や詩)に確りとかりることが出来れば、茨城の人は茨城弁(訛り)でかまわないのです。標準語=正しい日本語ではありません。
当教室では、手話を基軸とした朗読舞劇団の特徴を生かし、詩の朗読では感情表現として手話演技を取り入れた表現指導も希望される方には行います。

募集人員10名程度。教室は毎月第二、第四土曜日午後1時から3時。

受講料月額3,000円。(稽古場:石岡市国府4-3-3)

講師は、脚本:演出家の白井啓治、朗読舞女優:小林幸枝(手話演技指導)が当たります。

※詳しくは、ことば座事務局 0299-24-2063(担当:白井)までお問い合わせください。